

次回の定期演奏会をちょっと予習



©Makoto Kamiya



©Yuji Hori

第217回定期演奏会 円熟の境地

2026年5月23日(土) 13:45開場 14:30開演
指揮/角田 鋼亮(音楽監督) ソプラノ/森 麻季*
R.シュトラウス:4つの最後の歌 TrV296*
マーラー:交響曲第5番嬰ハ短調

〈ロマンティック・セントラル〉をテーマに据えた今季の定期演奏会も本日でフィナーレ、次回・第217回(5月23日)からは新シーズンの開幕です。次季のテーマは〈Go (=5) to the Central〉。我がオーケストラの名前にも冠されている〈Central(セントラル)〉とは「中心の、主要な」といった意味ですが、このテーマのもとに〈それぞれの作曲家の中心となるような作品〉へ焦点を当てていこう……といった意図を込めたテーマとなっています。

はたまた、〈ゴートゥ・ザ・セントラル〉にかけて、番号に〈5〉のつく作品を取り上げてみたり(面白いことに、第5番ともなると、それぞれの作曲家も円熟の極に至っているもので……なるほど傑作が多いのです!)、いろいろな含意とともにプログラムが考えられているとのこと。

その〈ゴートゥ・ザ・セントラル〉シーズンの開幕では、さっそく二人の大作作曲家の〈円熟の境地〉をお愉しみいただけます。リヒャルト・シュトラウスが生涯の最期に遺したオーケストラつき歌曲集の傑作〈4つの最後の歌〉と、マーラーが最も気力の充実した時期に書いたスケールの大きな〈交響曲第5番〉。

人生の黄昏を深くみつめた、限りなく美しい歌曲集のソプラノ独唱には、人気歌手・森麻季さんをお迎えします。指揮はもちろん、我が音楽監督・マエストロ角田。新しい季節の豊かな旅へ、ぜひその〈力のこもった!〉はじまりから体験していただきたいと思います。

◆リヒャルト・シュトラウス、生涯最期に極めた〈美〉

19世紀の後半——日本でいうと幕末に生まれたドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウス(1864~1949)は、若い頃、交響詩《ツアラウストラはこう語った》など、大規模なオーケストラ作品の数々で勇名を馳せました。やがてオペラの世界でも大成功。《サロメ》《ばらの騎士》など爛熟をきわめた傑作を連発してゆきます。

ウィーン国立歌劇場の音楽監督をはじめ指揮者としても大活躍。まさに20世紀前半のヨーロッパ音楽界をリードする存在だったのですが、もともと政治に興味がなく、いわば世間からズレていたこの作曲家は、やがてナチスの台頭と共に戦禍に巻き込まれてゆくドイツで、ますます苦しい立場へ追い込まれます。

ウィーン、ドレスデン、ミュンヘン……シュトラウスが栄光の日々を過ごした街々の歌劇場は爆撃で壊滅。第2次世界大戦は、懐かしいものをすべて壊し尽くしていきました。——ドイツ敗戦後、老いた作曲家は心身ともに辛い晩年を迎えます。

そんななか、亡くなる1年前に仕上げられた絶筆が、オーケストラつきの歌曲〈4つの最後の歌〉でした(1948年)。

◆ヘッセとアイヒェンドルフ、その詩に込められた想い

第1曲から第3曲《春》《九月》《眠りにつこうとして》は、ドイツの小説家・詩人ヘルマン・ヘッセ(1877~1962)の詩に作曲したものです。ヘッセは『車輪の下』などの小説で高く評価されていましたが、第1次大戦時に、好戦的なドイツを離れてスイスへ移住。反戦を強く訴え続けていたため、ドイツ国内では売国奴扱いされましたが、精神的危機に耐え、信念を貫きます。ドイツ敗戦後の1946年にはゲーテ賞とノーベル文学賞を受賞しました。

豊かな詩情を深めた先に、精神世界を深く探究していった彼は、若い頃から晩年まで多数の詩を書き続けた詩人でもあります。憧憬や漂泊の情感に溢れた抒情的なその詩は、時代から超越したような美しさを持っています。老作曲家R・シュトラウスが、同じ時代にナチスの敵とされながら詩情と自身の信念を貫いたヘッセの詩を選んだ、その意味は何だったのでしょうか。

そして第4曲《夕映えの中で》は、ドイツ・ロマン派の詩人・小説家ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ(1788~1857)の詩に作曲したものです。ア

イェンデルフの抒情詩は、19世紀からシューマンなど多くのドイツ作曲家によって作曲されてきました。親しみやすい中に美しい自然や心情を描いた彼の詩は、失われたものへの郷愁や憧れなど、ロマン派の時代を超えて私たちにも深く響いてくるものがあります。

ヘッセとアイヒェンドルフ——この二人の詩楽は、人生の最期を迎えつつある作曲家の視線を通して、たまたなく美しい音楽へと昇華されています。しかし、そこには激しい痛みや嘆きの声はありません。むしろ、夕暮れのなかにもどこか官能的なきらめきが、壮大な世界に對峙して立つ生の力が、柔らかに輝く希望の光が響いているようでもあります。

次回定期の前に、ぜひ、詩を熟読していただきたいと願います。非常に繊細な筆致で書き込まれたオーケストラの深い響き(実は演奏も至難!)と共に歌われる(ことば)を味わった上でお聴きいただければ、きっと音楽の語ることが何十倍にも深くつたわってくるでしょう。

リヒャルト・シュトラウス《四つの最後の歌》訳詞

訳 山野雄大

春

(ヘルマン・ヘッセ)

うすぐらい洞穴のなかで
私は長いこと夢みていた
その樹々を 背い大気を
その香りを 鳥のうたを

いま きみが罪をひらいた
壮麗な輝きのうちに
溢れこぼれる光とともに
広がっている 奇蹟のように

きみはふたたび私に気づき
優しく私をいざなってくれる
私のからだは震えるのだ
その至福の姿
きみあることの幸せに!

九月

(ヘルマン・ヘッセ)

庭はかなしく
花につめたく雨もふる
夏が 密かに身ふるいする
別れに向けて

アカシアの高い枝から
ひとつ またひとつ
滴るように黄金いろの葉が落ちる
夏は微笑む
いぶかしげに 力無く
消えゆくみどりの夢のうちに

薔薇の花のもとに夏は しばらく
やすらぎを慕い とどまっている
やがて夏は ゆっくりと
疲れた両目を 閉じてゆく

眠りにつこうとして

(ヘルマン・ヘッセ)

日のいとなみに疲れ果てて
いま 切なる願いは
眠たがることのように
星の煌めく夜が抱きしめること

手よ すべての動きを止めよ
額よ すべての思いを忘れ去れ
いまやこの身の感覚はすべて
まどろみの中に沈もうとする

誰に見張られることなく 魂は
翼も自由に浮かぼうとする
夜の魔法の国で
千のいのちを生きるために

夕映えの中で

(ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ)

私たちは手に手をとって
歩んできたのだ 悲しみのなかも
欲びのなかも
もう さすらいの足をとどめて
静かな地の上に やすらごう

まわりの谷が落ちこむように
あたりは暗く暮れてゆく
ただ二羽のひばりだけが
夕もやの中を引いてゆく
名残惜しいに

おいで ここに
鳥たちはさえずらせておこう
眠りの時が近づいてくる
この孤独のなかで 私たちは
迷わずにいよう

おお 夕映えの中に 深く
つつまれた 広い 静かな平和よ!
さすらいの疲れは私たちに重く——
ことによるとこれが 死 のだろうか?

◆マーラー充実の大作〈交響曲第5番〉

次回定期の後半は、リヒャルト・シュトラウスの先輩にあたる作曲家、グスタフ・マーラー(1860～1911)の傑作・交響曲第5番(1902年)です。

マーラーは生前「私には三重の意味で故郷がない」と語ったそうです。「オーストリアの中ではボヘミア生まれの者として、ドイツの中ではオーストリア人として、全世界ではユダヤ人として……どこへ行っても歓迎されることはない」。

激しい毀誉褒貶にさらされながらも彼は、音楽家として同時代の頂点へと駆け上がってゆきます。リヒャルト・シュトラウスより以前に、ウィーン宮廷歌劇場の監督として辣腕をふるい、当代随一の指揮者として活躍したのです。

指揮者として極めて多忙だったマーラーは、夏の休暇のあいだだけ、避暑地で作曲小屋にこもって、スケールの大きな交響曲を書き……という生活をおくっていました。彼は生涯に番号つきの交響曲を9つ完成させ(第10番は未完)、歌手二人を要する大作《大地の歌》も、番号のない交響曲として扱われることがありますから、それを入れれば11曲もの交響曲を遺したことになります。

青春時代から(早すぎる)晩年まで、生涯を賭して書き続けた交響曲——独創に溢れたその作品群の真ん中あたりに位置するのが、次回定期でお聴きいただく第5番、というわけです。

◆明瞭にして、奥深く、スケールの大きな傑作!

全5楽章から成るこの第5番、なんと葬送行進曲で始まる、という変わった交響曲なのですが、そこから激しい起伏を歩んでいった先、弦楽合奏とハーブだけで奏される、第4楽章(アダージェット)は、ルキノ・ヴィスコンティ監督の映画『ベニスに死す』(1971年)で使われて、一躍有名になりました。

マーラーはこの楽章を、愛妻アルマへ捧げる愛の歌として書いた、と言われてています。そう聴いてみると、音楽でしか語り得ない深い感情が満ちて渦巻いていること、全身で感じていただけることでしょう。

聴きどころは、それだけではありません。葬送行進曲に始まって、凄まじいまでに輝かしい終結へと至るこの曲は、ともすれば〈苦悩から歓喜へ〉という(ベートーヴェン以来の)定型も連想させましょうか。組み立ては、分かりやすい作品なのです。

ところが、明瞭な器のなかに入っている中身は、見事に計算された充実ぶり。特にフィナーレで多くの声部が掛けあい絡みあう動きの、なんと緻密なこと!

さらに、この交響曲には歌唱こそありませんが、豊かな歌謡性が溢れています。耽美の極のような歌ごころもあれば、あちこちで民謡風のメロディや響きが頻繁に割り込んでもきます。マーラー自身の過去の歌曲なども、しばしば引用してはパロディにしていたり……。

聖俗ひっくりめたスケールの大きい音空間は、〈苦悩から歓喜へ〉といった一方通行など、くると呑み込んで相対化してしまうようでもあります。自然の響きと呼び交わすように生まれる歌謡性ゆたかな世界、あるいは深刻な響きを切り裂くように闖入する通俗性……。嗚呼ほどに深い曲なのです。ぜひ、次回もこのホールで一緒に体感いたしましょう!

やま の たけひろ
山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』『音楽の友』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタステイカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターほか、CDや公演の解説、朝日カルチャーセンターでの音楽講座、歌詞対訳など多数。レイディエート・フィル正指揮者ほかアマチュア・オーケストラの指揮も。

Profile

